

言葉を科学する：人間の再発見

## Day 7 ちよつとだけ feedback

・Q：本当に吸てつ反応で、赤ん坊が音を区別しているかどうか分かるのだろうか。

**\* とても重要な質問です。（他のすべての科学研究同様）アイマスの研究も理論と仮説に基づいた方法です。吸てつ反応（あるいは心拍数の増減）に関しては、言語音の区別の研究以外に、乳幼児のさまざまな認知能力の研究において、信頼できる仮説・理論（乳幼児が違いを認知すれば吸てつの速さや心拍数が変化する）です。その理論に基づいた実験方法であり、この分野の多くの研究者が認めているという点で、信頼できる方法論であると考えるよと思います。（もちろん、その大本の理論・仮説が誤っている可能性は常にあります）**

・Q：アクセントパターンは、単語の「モーラ数+1」ということでしたが、モーラ数が大きくなっても、アクセントパターン数がどんどん増えていくとは思えないのですが。

・この原則は複合語の場合にも当てはまるのだろうか。

**\* 良い質問ですね。まず、複合語ではない単一の単語で5モーラ以上のものは、あったとしてもものすごく数が少ないでしょう。つぎに、複合語になればそれはそれに対する独自の規則が出てくるでしょう。句や文のレベルでも同様です。この規則は、あくまでも単純単語に関するものと考えておいて下さい。**

・Q：よみがなを振るなら「せんたくき」「せんたつき」、どちらも可。どれが正しいのでしょうか。

**\* とても重要な問いです。弱化母音が完全に脱落する例と脱落しない例とが共存している単語もたくさんあります。手元の電子辞書では、「せんたくき」「せんたつき」のどちらも受け入れてくれます。一方、多くの人があるように発音しているにも関わらず、脱落形が辞書に載っていない例もたくさんあります。体育館は「たいっかん」と入力しても変換してくれません。さらに、脱落形が辞書形（つまり必ずそのように発音される）となっている例もあります。「白球」など。注意しなければならないのは、この言語学では、「どうあるべきか」は問いません。「実際はどうなっているか」を明らかにするのが目的です。授業の第2回目で論じた、「規範的態度 prescriptive grammar」と「記述的態度 descriptive grammar」との区別を明確に。**

・Q：日本には多様な方言が存在しますが、英語はアメリカ英語・イギリス英語といった区別以外に細かな方言差というものはないのでしょうか？

**\* あります。イギリスなど（EnglandではなくUKのこと）日本に負けないくらいたくさんの地域方言があります。また、イギリスには今でも社会的方言差もあるようです。イギリスほどではないにしても、アメリカにもたくさんの地域方言があります。プロの音声学であれば、ボストン（東海岸 New England）の出身者、シカゴの出身者、NYの出身者、カリフォルニア（西海岸）出身者、アラバマ（南部）の出身者、などを話し方で比較的簡単に区別できるでしょう。**

・Q：音韻規則を共有していると同じ方言を話していると認識されるということでしたが、どの単語に関しても 100%発音の仕方を共有しているということはあまりないように思うので、どのくらい音韻規則を共有していたら同じ方言、どのくらい違ってくると違う方言、と認識されるのでしょうか。

**\*素晴らしいポイントです。客観的に分析できるほど、数値化されたデータがまだ整っていないでしょう。微細な個人的違いに寛容な地域もあれば、あまり寛容ではない地域もあるかもしれません。**

Q：言語は言いやすさを追求して、音韻規則を整えているということでもいいのでしょうか。それとも、言いやすさをあえて無視することもあるのでしょうか。

**\*とても重要な問いです。ここでは、2点コメントします。まず、「言いやすさ」をどのように客観的に定義するかが、大きな問題になります。次に、純粋に物理的発音のしやすさだけを考えると、全ての言語音が「ba」になってしまいます。もっとも発音しやすい音です。すると数百年後の日本語では、「お金を貸してくれませんか」が、babababababaと発音されることになってしまいます。したがって、音韻規則や時代による発音の変化が、発音のしやすさだけの問題ではないことが分かると思います。最後に、自分の母語はその発音上の規則が（無意識のうちに）身につけているので、それに反する発音は「言いづらい」、それに従っている発音は「言いやすい」、ということになります。したがって、自分の母語の音韻規則に対して、発音しやすくするためにこのようになった、という結論には注意が必要です。たとえば、「全員」という単語。発音のしやすさだけに限定すると「ぜにん(zenin)」になるかもしれません。「ぜ～いん」という発音は（日本語のある音韻規則に従ってはいますが）、日本語母語話者以外から見て、「発音しやすいように」変化しているとは必ずしも言えないようです。**

Q：同じ言語なのに、方言によってイントネーションや音韻規則が異なるのはなぜなのかと思った。

**\*ここでは、とても重要な問いが発せられています！「同じ言語」とはどのように定義されたものを想定しているのか、というのが第一の問題です。言語の話し手は1人1人別々で、その脳もみな別々です。その意味で、なにを根拠に二人以上の特定の人間を「同じ言語」を話している、と定義できるのか。第二の問題は、もし「同じ言語」を社会学的・政治学的に区分しているのであれば（そのこと自体は大きな問題ではありません）、その定義は言語学的には何の意味もありません。ベルギーは政治的には1つの国家ですが、その中に母語として話されている言語は、少なくとも三つあります（ドイツ語、フランス語、オランダ語）。東京山の手方言をもとに人工的に作られた日本語の標準語に関して、もし、「それを話すべき、それに従うべき、それに従っていないものは悪い言語（方言）」という意識が存在すのであれば、そのことがたいへん大きな問題であると思われれます。この授業で少しずつ見えてきていると思いますが、どの方言も独自の立派な規則・体系を持っています。**

Q：無意識のうちに音韻規則に従っている問う点に関して、生活にどのような効果を生み出しているかということに関して、自分なりに考えてみて、... 帰属意識を持つためではない

かなと考えました。

**\*これは素晴らしいコメントです。言語が（どのような話し方をするかが）その人の帰属意識に強く影響していることは十分に考えられます。これは、裏を返すと、特定の個人をある共同体に入れる・入れない、という価値判断の根拠として、その人の話し方が機能することもあるわけです。じっくり考えてみる必要がある大きな問題です。**

・Q：全ての音素が区別できるようになったら、確かに外国語学習はスムーズに行くかもしれないが、私にとっては知らない言語を学ぶ楽しみが失われてしまいそうである。日本語話者には理解できない発音に出会って、なんだこれはと思いつつも、少しずつ分かるようになって（それこそ忘却していたものを「思い出して」）言語を習得することは、外国語学習の1つの喜びであり、動機づけになっていると感じる。

**\*素晴らしいコメントです！（質問ではありませんが、是非、みんなに考えてもらいたい内容なので、載せました）**

**<以下、質問ではありませんが、鹿児島弁の宿題に対して、とてもよいコメントがたくさんあったので、いくつか紹介します>**

・奥先生が鹿児島弁は美しいと太鼓判を押す理由が本書を読むことによってよく理解できた。しかし、鹿児島弁母語話者である窪菌晴夫さんが書いた本であるから、自身の話している言語が美しいと感じるのはある意味当然のことであると感じた。しかしながら反面、生粋の道産子である私にとってみれば、北海道の方言は標準日本語とまったく差異がない（と私が勝手に勘違いしているだけかもしれないが・・・）言語であると感じているためつまらないと思うのもまた事実である。日本語と一口に言っても古来は小国や藩に分かれていたので、都道府県の数以上の言語が現在の日本国内に飛び交っていると言えるのではないだろうか。そうだとすると、日本人は50以上もある日本語を総合的に聞き分けられる能力を持っていることになり、日本語は素晴らしいと思ってしまう。とはいえ、たとえばアメリカでは50もの州に分かれている関係から、日本以上にアクセントが異なる英語が飛び交っているだろう。さらに世界的に見れば、イングリッシュに準じたシングリッシュ（シンガポールで話される英語）、コングリッシュ（韓国で話されている英語）などなど、一口に英語といっても様々な種類があることは上記の事実から明らかであり、英語も日本語も非標準語がたくさん存在することを窺い知ることができる。したがって、日本語だけが特別な言語ではないと冷静に分析した結果の末に感じた。もちろん、鹿児島弁がごく単純な数理的規則に基づいていることも注目すべきポイントであると思うし、この著書を読むことで改めて日本語の面白さを再認識・再発見することができたと思うと強く感じ、満足している。

・鹿児島弁、そしておそらくほかの全ての方言は、標準語と異なる論理や体系があることに驚いた。しかも、鹿児島弁のアクセント体系は世界でも珍しい単純さと生産性で、海外でも評価されているようなので、「方言は標準語より劣った言語」という考えは大間違いだと改めて思った。方言というのは、自分が生まれ育った土地以外のところはちゃんと練習しなけ

ればそれっぽく話せず、似非方言になってしまう、というイメージが私の中にはあったのだが、鹿児島弁は一見複雑な方言に見えるが実際は結構単純で、とっつきやすい方言だと思った。しかし、標準語や私の場合では北海道弁のアクセントにすっかり慣れてしまっているのも、A型・B型の単語のアクセントを今更いちいち覚えていくのは結構時間がかかり、困難な作業でもあるのではないかと思った。アクセントに関しては、外国語の勉強と大差ないのではないだろうか。私が疑問に思うのは、なぜ地域ごとに方言として異なる言語が存在するのか、ということだ。国家間で言語体系が違うのはわかるが、日本という一つの国の中でもたくさんの方言が存在するのはなぜだろう。考え方や生活習慣が大きく異なっている、というわけでもなさそうだから、一つの言語体系でも支障はないと思うのだが、現在のような体系の細分化の理由はなんなのだろうかと思議に思った。